



戦争反対、平和を築く

JCJ 8月集会

JCJ 8月集会に向けてのメッセージ

2024.8.17

第一部 JCJ 支部・部会からのメッセージ

戦争は、ここにも

神奈川県は、沖縄県、青森県に次いで、全国で3番目に米軍基地面積(専用・共用)を抱えている。

横浜ノース・ドックが昨年から、南西支援をにらみ米軍小型揚陸艇部隊の根拠地に再編されるなど、最近の軍事情勢は神奈川にもひしひしと響いて来ている。

米第七艦隊の事実上の母港とされている横須賀基地、米軍厚木飛行場などは、いったん有事になれば当然、優先的な攻撃ターゲットになる。特に横須賀を母港としている原子力空母は、ミサイル攻撃を受ければ原発事故と同様に放射性物質拡散の大惨事を引き起こしかねない。影響は横浜、湘南、東京など県内外に及ぶだろう。危険性は「首都圏の原発」とも形容される。

だから、決して戦争を起こしてはならない。

身に迫る問題として、神奈川支部も声を大にして、そう訴える。

JCJ 神奈川支部

軍拡ではなく対話を続け、人々の暮らしを守ろう

陸上自衛隊大分分屯地周辺の住民らが抗議の声を上げる中、国は敵基地を攻撃する「スタンド・オフ・ミサイル」を保管する大型弾薬庫2棟の着工を開始した。湯布院駐屯地(大分県由布市)に配備される新たなミサイル連隊と一体化した運用が見込まれる。

北九州市内には九州最大規模ともされる富野分屯地がJR小倉駅からほど近い住宅地にある。北九州空港の滑走路3000m化や航空自衛隊築城基地(福岡県築上町)での日米合同訓練などが行われており、北九州支部は軍拡の動きを監視することを決めた。

メディアは「日米同盟」を日常的に書き立てている。確かに、中国や北朝鮮の動きは危ういに見える一方、例えば、コメの備蓄量は過去最低など、自給率は多くの品目で極めて低い。安全保障を言うならば、同時に国民が有事にも食べていけるようにすべきであるが、国には国民の命や生活を守る視点があまりにも低い。

仮に、局地的であっても周辺で紛争や戦闘に巻き込まれれば、基地や弾薬庫は真っ先に攻撃の対象になることは、ウクライナやガザを見ても明らかである。

そうさせないために、軍拡ではなく対話を続け、人々の暮らしを守ることを優先すべきである。

勇ましい言葉で戦争に突き進めば命、暮らし、財産などが一瞬で失われる。もう戦争、人殺しは真っ平だ。日本ジャーナリスト会議(JCJ)北九州支部は、そんな当たり前のことをこれからも訴え、国に働き掛けていきたい。

JCJ 北九州支部

あの誓いを思い出せ

79年前の夏、戦争が終わった。
たくさんの人が殺され、
たくさんの人を殺した戦争が終わった。
東京で、沖縄で、あちこちのまちで、
たくさんの人が殺された戦争が終わった。
原爆がふたつ落とされ、
ふたつのまちとそこに生きる人たちを焼き尽くして、
戦争が終わった。

そして、わたしたちは、二度と戦争をしないと、世界に誓った。

戦争は終わっていない。
ウクライナで、パレスチナで、戦争は続いている。
アジアで、アフリカで、世界中で、殺し合いは続いている。

戦争をとめたい。殺し合いをとめたい。
みんなが願っているのに、とめられない。

かつて、北方脅威論があった。
北海道はその最前線だった。
いま、南の島々で脅威を叫び、要塞をつくる者たちがいる。

脅威をあおるのは、いつも大きな力を持つ者たち。
戦争を始めるのは、いつも大きな力を持つ者たち。

大きな力を持つ者は、ほしいままに力を振りかざす。
大きな力を持つ者は、一人ひとりの命をかえりみない。
大きな力の前に、平和を願う声は無力なのか。

小さな声だって集まれば無力ではない。
声をあげよう、小さな声を。
戦争の犠牲になり、平和な戦後を築いてきた先人たちのために。
未来を生きる子や孫たちのために。
そして、いまを生きるわたしたちのために、世界中の人たちのために。

平和をつくるのは武器ではなく、言葉なのだ。
言葉のスクラムなのだ。

わたしたちは、二度と戦争をしないと、世界に誓った。

日本よ、あの誓いを思い出せ。
この世界に平和をたぐり寄せするために。
もう二度と戦争をしないために。

軍靴の足音が聞こえる

わずか80年前に、日本が敗戦で焦土になったとき、日本国民の誰一人として「再び戦争ができる国」になることは考えもしなかった歴史がある。米政府を中心とする連合軍から期待された「戦争ができない国づくりの憲法」ができて、国民の感情には「青空」が広がった。

それが、米政府にそんたくした「戦争ができる国」「米軍の下請けとなって戦う自衛隊」へと大きく右旋回した。80年たって日本政府は、「老人大国」の名前の通り「物忘れ」をしたとしか思われぬ「軍備増強」を次々に進めている。日本国憲法では許されないにもかかわらず、その憲法を壊してまで国民を「戦争の恐怖」に駆り立てる自公政権は、一刻も早く退場させなければならない。

JCJは、日本の民主主義、平和国家を軍靴の足音から一歩でも二歩でも遠ざけるため力を尽くすこと、そこに存在意義がある。福岡支部も微力ながら、その一翼を担うことを誓い、活動するものである。

JCJ 福岡支部

「平和がいい」「戦争は嫌だ」という思いは人なら誰もが持っていると思いたい。けれども「平和」とはほど遠い状態が、国内外からなくならないどころか、ますます現実には厳しさを増している。

「歴史は繰り返す」という。戦前と現代の日本の状況はよく似ている。タレントのタモリ氏が2023年を前に「新しい戦前」になるのではないかと危惧を口にしたように、そうならないために、そうさせないために、その延長にある今がまさに正念場と言えそうだ。

日米安保の下で自衛隊と米軍の連携が強化されている。言論・表現の自由への圧力の高まりもある。「戦争」を引き寄せる要因になりそうなものが増えている。最低でも戦争に向かわせない政治でなくては困る。

政治と日常は地続きだ。放っておけば権力が暴走することは歴史を見れば明らかであり、政治権力のチェックが欠かせない。権力を暴走させないためには、一人一人が「おかしいものはおかしい」「それはいけない」と声を上げることが基本だ。諦めてはいけない。

技術の進歩もあり、虚偽情報があたかも事実であるかのように受け止められてしまう時代だ。真実は何か、本質はどこにあるのかを見極めて行動できる人を増やすことが、漢方薬のように「戦争」回避に効いてくるはずだ。そのためにもJCJには考える材料、真実が見える情報の発信にこれからも力を注いでいくことが期待されていると思う。

JCJ 新潟支部

8月は反省の月、1945年広島・長崎そして敗戦。以来年月は経ったが、被爆の惨状や戦禍の悲劇をめぐっては毎年新しい証言がある。初めて重い口を開く人もいる。語っても語っても語り切れない無念や苦しみ悲しみがまだまだあるのだろう。

先学の言を借りて恐縮だが、「私たちは戦争体制と原爆の恐ろしさの何を知っているだろうか」。

先人たちの思いを、私達は存分に伝えることが出来てきたであろうか、反省は止まない。4年前から8月はそれまでの8月とは違っている。核兵器禁止条約が発効して核兵器は違法となった。多くの市民の願いを聞かず日本政府は条約への参加をまだ拒否している。ここに反省はない。

JCJ 関西支部

「広告支部ニュース」の活用でネットワーキング

支部独自に発行している「JCJ 広告支部ニュース」(月刊)は、現在266号、20年以上継続しています。現在は電子版があるので、広告支部会員以外どなたでも希望者には無料で配布しています。誰でもどんなテーマでもがコンセプトです。例えば、政府の財政赤字についての批判記事、戦争反対パレードの記録、そして日々の暮らして感じるエッセイもあります。寄稿者の所在地も国内に止まりません。

平和で自由な社会であってこそ、誰もが思ったことを表現できるのです。しかし、残念なことにこの20年の間でも今が最も、戦前を感じます。戦争を始めたい国家権力に対して、一人一人の声は小さく弱くても、つながることで戦争させない声を大きくしていきましょう。支部ニュースの充実とネットワーク機能の強化を通して「戦争に反対し平和を築く」取り組みにつなげていきます。

JCJ 広告支部



戦争反対、平和を築く

JCJ 8月集会

JCJ 8月集会に向けてのメッセージ

棄憲・壊憲許さず

国民と共に立たん

「JCJ 8月集会」の再開を祝します。

ガザ、ウクライナでの破壊と蛮行のジェノサイド、その先に核兵器使用の脅し…、そんな下で、「核抑止と軍拡」を掲げる岸田政治の日本と被爆79年を迎えた広島に世界の目が集まる。核兵器に人類の未来は託せないが、だからこそなのか、IT革命も手伝って情報戦もまた激しい。「ヒロシマ変質か」の動きも加わって、混迷が膨らんでいる。

昨年G7サミット、あろうことか名を冠した核抑止是認の『広島ビジョン』を発した。松井広島市長は今年の平和宣言で核抑止力の政策転換と対話、市民の声と行動を提起した。一方で式典にロシアとベラルーシを排してイスラエルを招待する言動不一致も。6日は式典前後の4時間、原爆ドームを含む公園全域で市民行動を規制、分断と監視に批判も出た。

敵基地攻撃能力の保持や自衛隊が米軍指揮下に…など、「壊憲・棄憲」が進む。民意無視、機能不全の国会、時として司法も…放置できない現状。「国民と共に立たん」と誓った戦後ジャーナリズムの心意気を思い起こし、市民の声と行動と、その心を広く深く伝える、その道を掘り起こしたい。

JCJ 広島支部



戦争反対、平和を築く

JCJ 8月集会

JCJ 8月集会に向けてのメッセージ

第二部 JCJ 会員、個人からのメッセージ

「防衛費」を「軍事費」に。「防衛力」を「軍事力」に——。40年余り前の提言（坂本義和「『防衛』問題の落とし穴」『朝日新聞』1981年1月3日）を各メディアに投げかけたい。「専守防衛」を投げ捨て、「敵基地攻撃」能力をめざす現在であれば、なおのこと「攻守」両面を示す言葉の使用こそ客観的、中立的であり、報道において適切だといえるのではないか。

坂巻 克巳

ラジオから「軍艦マーチ」の曲が流れると海軍の戦果発表、「敵は幾万」なら陸軍の戦果発表だった。そして私は「若鷺の歌」を歌い特攻の卵「予科練」志望の軍国少年となった。だから私はメディアの戦争協力には気配の段階から厳しく臨む。

加藤 剛

歴史の改ざんを許さず、戦争の“被害者”、“加害者”、“抗う者”の視点でリアルに検証すること。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」（日本国憲法前文より）。

谷井 利明

軍拡の動きに、私たちはどう対抗するか

つくづく人の非業さを想う。

人の世から戦いをなくすためいったい何をすればよいのか？

日本国憲法は9条に戦争放棄を謳った。

しかしそれでも戦いは終わらない。

自衛権を放棄し、武器、軍隊を放棄し、「一国主義」を放棄することを公に宣言することが、世界から戦いを失くす第一歩ではないか、と思う。

迫 雅之

中村哲さんがアフガンで事業を続けられたのは「憲法9条がある日本から来た医師」という信頼が大きかったからです。世界から得ている「信頼」を壊す憲法改悪なんて、もってのほか。十分に生かしていない「世界の宝・憲法9条」を、声を大にして活用しよう。

白垣 詔男

「あらゆる地獄を集めた」と言われた沖縄戦の体験から得た「命どう宝」「軍隊は住民を守らない」が戦後沖縄の原点です。県民の願いとは真逆に進む軍事要塞化、人権侵害、日米の植民地化に NO! 平和で自然豊かな島を!

浦島 悦子

日本は米国の軍事戦略に組み込まれた。統合軍司令部は自衛隊を配下において兵を自由に動かせる。ベトナム戦争で米高官は「米兵を極東で死なせることはない、アジア人を使うべき」と発言。結果、韓国兵は最前線へ。自衛隊は憲法上無理だったが、今や憲法蹂躪の自民政権である。日本兵を使う時が来たのだ。

中村 悟郎

為政者らによる「中国脅威論」の怪しげな喧伝が日本国民を不安に陥らせ、軍拡の背中を押している。ナチス・ドイツの最高幹部ゲーリングのあの言葉を何度でも想起し、心したい。「もちろん、一般市民は戦争を望んでいない。簡単なことだ。外国から攻撃されていると説明するだけでいい」

橙

太平洋戦争時は、名古屋市堀田国民小学校1年生から岐阜県中津川市苗木の開拓地へ疎開しサツマイモづくりに明け暮れた。小学校で勉強した記憶は皆無である。

安保 邦彦



私の思いを綴った備忘録から、〈終戦 8・15〉を巡る随想を 3 つほど披露し、
平和を願う私のメッセージとしたい

母の 8・15 と私の胃カメラ写真

私の母は 2014 年に白寿で亡くなったが、母が迎えた 1945 年 8 月 15 日の話から始めよう。
〈その日はカンカン照り。夫は長野須坂の部隊にいて不在。留守を預かる浦和市常盤町の借家で
聞いた玉音放送は、ガーガーという雑音入りでよく聞きとれなかった。それよりも「死ななく
てすむ」という安堵感で、5 歳を頭に 3 人の子をひしと抱きしめた。町会長が日本の敗戦を住
民に改めて告げて回った。その夜は残りわずかの配給の芋を蒸かし、玉蜀黍の屑粉を湯で溶い
てみんなで食べた〉

とつとつと思いを込めて語ったのは、2005 年の 8・15 だった。その時、63 歳の私は母の話
を咀嚼しつつ、胃カメラ検査で医者へ。渡された胃のレントゲン写真に 2005.8.15 の日付が印
字されていた。

(2005/8/15)

「丸山眞男」の横っ面をひっぱたく世

2014 年に生誕 100 年を迎えた丸山眞男は、くしくも敗戦の 8 月 15 日、82 歳で生涯を閉じた。
戦後日本が生んだ最大の知識人といわれるが、その軌跡はどうであったのか。

学生時代に読んだ『超国家主義の論理と心理』（未来社）には圧倒され、〈軍国支配者の精神
形態と無責任の体系〉というキーワードは、目から鱗だった。その後、全共闘世代によって、
戦後民主主義の欺瞞の象徴として糾弾され、時には「観念論的・傍観者の歴史観」との批判も
高まった。

福沢諭吉を「典型的な市民的自由主義」の思想家とする評価も、彼が勝手な読み込みによっ
て造りあげた虚像だとする研究もある。

さらにフリーターの赤木智弘は、陸軍 2 等兵として徴兵された丸山が、中学にも進んでいな
い 1 等兵から執拗なイジメのビンタを受けた体験に関連し、今の若者は、社会に出ればすぐ序
列が決められ、一方的にイジメぬかれる。

「戦争は、現状をひっくり返して『丸山眞男』の横っ面をひっぱたける立場にたてるかもしれ
ない、まさに希望の光」とすらいう。

丸山は除隊後、広島で被爆。戦後、一貫して平和と民主主義を根源的に問いつづけた彼が、ひっ
ぱたかれる世になった。どう考えたらよいのか。

(2014/8/17)

戦後 77 年「8・15」を顧みるに大事な出来事

戦争の 77 年・平和の 77 年—2022 年の現在から顧みるに、日本は明治維新（1868 年）から敗戦（1945 年）までの 77 年が「戦争の時代」。無謀なアジア・太平洋戦争に突入し、敗れたのち平和憲法のもとに歩んできた戦後 77 年は「平和の時代」である。

しかし、いまその歩みに急ブレーキが掛けられている。専守防衛から敵基地攻撃にカジを切り、米国の核兵器を国内に配備し、日米で共同運用する「核共有」に向け、憲法 9 条をズタズタにする動きが強まっている。

第 2 次岸田内閣が発足しても、統一教会との関係では閣僚 20 人のうち 7 人、副大臣・政務官 54 人中 19 人が接点を持っていた。また安倍政権の大軍拡・改憲シフトは継承し、コロナ感染拡大・物価高騰・賃金格差・ジェンダー問題などなど、山積する課題への取り組みは「検討する」のみ。まさに「検討使」内閣だ。

ベーブ・ルースと大谷翔平—8 月 16 日は「ベーブ・ルース忌」だ。あの「野球の神様」といわれた米国の大リーガー、ベーブ・ルースが、今から 74 年前の 1948 年に 53 歳で亡くなった日。

くしくもこの 8 月 10 日に、エンゼルスの大谷翔平投手が、「2 ケタ勝利 & 2 ケタ本塁打」を達成した。元祖二刀流のベーブ・ルースが 1918 年に達成して以来、104 年ぶりである。その快挙への賞賛は世界に広がる。

40 歳になったベーブ・ルースは、戦前・1934 年 11 月 2 日に来日している。米国大リーグ選抜チームの一員として、大凶作に見舞われた国内を巡回し全 18 試合を行った。日本チームは歯が立たず大敗した。

デッチあげられた松川事件—さて、もう一つ、今から 73 年前、1949 年 8 月 17 日、松川事件が勃発した。当初から松川事件は、下山事件（7/6）、三鷹事件（7/15）と合わせ、国鉄労組への日米権力が共同した弾圧であり事件捏造の疑いが言われていた。

1963 年 9 月 12 日、最高裁は被告たちに無罪を言い渡した。裁判の流れを決定的に変え、無罪を勝ち取る経過には、新証拠の発見とともに、作家広津和郎らによる被告の救済支援活動をはじめ、学者・文化人、市民をも巻き込んだ国民運動の発展があった。日本ジャーナリスト会議も参加している。

こうして振り返ってみると、「8・15」前後には、エポックメイキングな出来事が起きていたのだ。歴史を見つめ今を考える良い機会にしたい。

(2022/8/14)

守屋 龍一

全国民にジャーナリズムを考えてもらう機会に…JCJ 8月集会に寄せて

日本の新聞は、大正から昭和に掛けて、軍部には批判的な姿勢だった、と言われていますが、関東軍の謀略を、中国軍のせいにした1931年の柳条湖事件（満州事変）以後、大きく方針転換して、軍に協力し、戦争を煽るようになりました。

1945年8月の敗戦は、嘘ばかり書いて国民を欺き続けていた、新聞の在り方に深刻な反省を迫りました。「自らを罪するの弁」（朝日8月23日）はよく知られていますが、全国の新報56社中、44社で社長や重役の経営陣が交代し、あらためて「新聞は戦争に協力しない」「真実の報道を貫こう」と誓い合うことになりました。

戦時期の自らの戦争責任を自覚した「ジャーナリストの会」は、1946年1月、聴濤克巳（「朝日」）、鈴木東民（「読売報知」）氏らを発起人に、新聞、通信、放送、出版各分野のジャーナリストが集う「日本ジャーナリスト連盟」をはじめ、「知識人の会」「プレスのかい」として結成されましたが、「朝鮮戦争前の報道規制の中で活動停止」（増山太助氏聞き書き、大原社研）に追い込まれました。

JCJは、その反省を受けて、1955年2月結成。同年12月には機関紙「ジャーナリスト」も生まれ、以来、JCJは安保闘争やベトナム戦争で米国からの攻撃を受け、文化大革命の中で中国からの干渉を受けながらも、「再び戦争のために、ペン、カメラ、マイクを取らない」という「誓い」を新たに、活動を続けています。

毎年の「ジャーナリスト8月の夕べ」は、そうした、ジャーナリズムを見つめ直し、JCJの運動を広げていく会でしたが、コロナでJCJ賞授賞式が9月になったことで、2019年を最後に中止されていました。いま、かつての戦争を知る人が少なくなり、「新たな戦前」の危機が深まる中、JCJの精神を広く伝えていくことは極めて重要です。全国のすべての人たちに、ジャーナリズムを考えてもらう契機になるといいと思います。

丸山 重威

軍拡にどう対抗するのか

あらゆるレベルで世界の国々・地域との間で対話と相互理解を進めることが第一だ。その上で、日本は米国の戦争政策に距離を置き外交的自立を図らなければならない。日米は「抑止力と対処力」の強化という威嚇に躍起となっている。これを「対話と相互理解」に反転させ、軍縮へ非戦へ流れを変えなければならない。地球環境、国家財政、世界の人道状況を見れば、軍拡の余地などない。「対話」に道を見いだすしかない。

米倉 外昭

世界中で続く戦争、虐殺を止めるためのジャーナリズムを実践できているだろうか。広島に身を置く者として、そう自問しない日はありません。「戦争のために二度とペンを取らない」。戦後のジャーナリズムはそう誓うことから再出発したはずなのに、その原点を忘れかけているような雰囲気さえ感じます。私たちは命を守り、平和をつくっていくためにペンを取るのだと、今こそ再確認したいと思います。

小山 美砂

昨年来「戦争の記憶を消してはいけない」と題して全国で講演を行ってきた。この言葉は作家の井出孫六が好んで使っていた言葉である。また吉村昭は「戦争に対する見方は、その年齢と広い意味での教養によって、千差万別なのだ。……だから私の眼にした戦争は、あくまで私の年齢が見た戦争であり、それは決して普遍性を持ったものではないだろう。」と書いている。吉村と同じ年に生まれた辻井喬は、まったく違う体験をしているし、その上の世代の大岡昇平などは、もっと過酷な体験をしている。

私は1949年生まれ。戦争を知らない世代である。その「戦争を知らない子供たち」はいまや「戦争を知らない老人たち」になった。私たちは、次の世代へ、若者たちへ、どのように「戦争の記憶」を伝えていくことができるのだろうか。井上ひさしの言葉に「思い残しリレー」というものがある。先人の体験を、現在（いま）の人間が学び、その言葉を次の世代へと繋げていく、その想像力こそがいま求められている。

山口 昭男

私は今、8月集会に向けて、J・オダネル写真集『トランクの中の日本』と月刊『地平』（2024.8）特集「戦争準備への対抗」の論文・座談会、日本共産党『徹底追及安保3文書』を精読中。

皆さんとともに日本の「新しい戦前」を具体的に阻止する方策を論議し、立案しましょう。

大場 幸夫

平和であるからこそ、暮らしが成り立っているのです。自民党など一部にそれを壊すような動きがあります。メディアは覚悟を持って政治を変える一翼を担う必要があります。

隅井 孝雄

東京都南鳥島は陸自ミサイル射撃場整備で一変、 核のゴミ最終処分地説は幻に、おぞましい光景目に浮かぶ

中台戦争勃発を見据えて南西諸島に自衛隊の基地が次々と建設される沖縄県。県民は戦争の足音がヒタヒタと近づいていることを肌で感じているだろう。東京に住んでいると、予想はつくけれど、感覚がつかめず、他人事に陥ってしまう。

しかし、最近ある出来事で自分の心は変化した。南鳥島に陸上自衛隊の地对艦ミサイル訓練用の射撃場が整備される。日本最東端のサンゴ礁でできた南鳥島は小笠原村の一部で本州から1800キロ離れているとはいえ、れっきとした東京都の島だ。射程100キロを超えるミサイル射撃場の整備は日本で初めて。住所が東京都という場所から再来年以降、ミサイルがバンバン海上に向かって発射される——おぞましい光景が目には浮かぶ。やはり戦争がこちらに向かってやってきているという感じを持ち都民である自分の心はざわついている。

南鳥島には以前から関心を抱いていた。なぜか、この小さな島こそ日本で唯一と言っても過言ではない核のゴミの地層処分（地下深く埋める）の適地と話題になったからだ。

これを提案したのは静岡県清水市に施設を構える東海大学海洋研究所の平朝彦所長（地質学者）だ。県知事時代の川勝平太氏との対談（今年1月静岡県の総合情報誌「ふじのくに」に掲載）で、平所長はこう述べている。

「南鳥島は太平洋プレート（太平洋の海底の大部分を占める岩盤）上にある唯一の日本領土で、周囲6キロの国有地。最大の特徴は地質的な安定性です。地震、火山活動はまず起きない。これは確信を持って断言できます。なおかつ、住民がおらず漁業権など、いろいろな権利が設定されていない。地下へ数キロのボーリングをして、使用済み核燃料を処分するキャニスター（核のゴミの廃液をガラス原料で溶かし合わせたものが入ったステンレス容器）を入れて、セメントで封印することもできます。地球上で最高レベルの安定性があるので、壊れる不安はまずありません」「最適な核廃棄物処理方法だと信じて疑いません」

これに対して川勝知事は「国難を救える島」「モデルケースを日本が提供できれば、世界に誇れる提言にもなります」と平所長の研究を称えた。

現在、島には海上自衛隊と気象庁職員が常駐しているだけで、一般住民はいない。

実は平所長は、南鳥島は核のゴミの地層処分の最適地とローカル局の北海道放送（HBC）の取材で3年前に提言している。所管の経産省にもこの提言を伝えたが、返事はなかったそうだ。

地震大国・日本には10万年以上も核のゴミを封じ込める適地はないと言われているが、南鳥島が適地となるとその説は覆る。僕は平所長に取材を申し込んだが、残念ながら「南鳥島での地層処分をさらに研究したい」と断られた。

また島にはEV（電気自動車）に使われるレアメタルが豊富な鉱物が大量にあることが東京大学の調査で明らかになった。ミサイル射撃場の整備により、核のゴミの最終処分地候補は幻の説に終わり、レアメタル商業化も風前の灯火になりそうだ。南鳥島は今の姿から一変するのは間違いない。

橋詰 雅博

映画『Reds』で Warren Beaty 扮する主人公のジャーナリスト John Reed が第一次世界大戦の原因を「Profits!」と吐き捨てるように喝破したシーンを新鮮に覚えています。息を吹き返しつつある日本の「死の商人」。いかなる戦争による利益も許してはなりません。

川田 豊実

中米のコスタリカは非武装中立を宣言、軍隊や基地を持ちません。大統領、国会議員は連続再選禁止。平和とは、全ての基本的な権利が尊重され、遵守されることだとこの国のサモラ弁護士に聞きました。なるほど！と思います。

高野 春広

「祀る国家とは戦う国家である」(思想史家の子安宣邦氏)。この言葉を地で行く事態が日本で起きている。旧日本軍の侵略戦争の精神的支柱となった靖国神社と、自衛隊の接近が最近、目につく事態が相次いでいる。

新年の能登半島地震が起きた中でも決行された陸上自衛隊ナンバー2の陸幕副長ら幹部22人による年頭参拝、海自の初級艦隊に乗務する初級幹部ら百数十人による集団参拝、元海将が靖国神社の宮司に就任した。さらには現役の隊員たちがSNSで「大東亜戦争」と呼び、沖縄に駐屯地がある部隊がHPに沖縄戦の司令官の辞世を掲載する。そして、歴代の幕僚長たちが将来の戦死者に備えよと靖国神社の社報で主張する。そこには、日本の侵略戦争旧アジア太平洋戦争でのリアルな事実はなく、軍隊目線の美化された物語ばかりが占めている。そして、こうした事象が文民統制(シビリアンコントロール)がゆるみきった中で起きている。軍拡に突き進ませるわけにはいかない。「戦死」が「美徳」となる国にしてはならない。

矢野 昌弘

子どもの頃住んでいた近所の農家、2階全体が蚕室で1階一番広い部屋の鴨居には軍服姿の遺影がぐるりと並んでいた。天皇皇后の御真影も。ひとりでこの部屋を過ぎると怖い視線が追いかけてきた。後年、あれはと伺う機会があった。日清戦争の頃は写真もない時代だったが、その後の日露、第一次、日中そして太平洋戦争、その度に戦死者を家族から出したのだった。戦争に明け暮れた戦前を呼び戻してはならない。

山中 賢司

新しい戦前といわれて

〈あなたは勝つものとおもってゐましたかと
老いたる妻のさびしげにいふ〉

土岐善麿さんの有名な歌です。新しい戦前が言われ始め、秘密保護法も。広島ではプラカードやゼッケンも禁止とか。二度とこんな歌を作らなくてもいいように、一つ一つ丁寧に反撃していきたいと。

最後に土岐さんの歌もう一首

〈遺棄死体数百といひ数千といふ
いのちをふたつもちしものなし〉

齋藤 昌克

戒厳令下のような？とまでは思わないにしても、なぜこれほど嚴重な警備態勢をとるのだろうか。公共の公園に立ち入るのに手荷物検査を受けないといけない、プラカードやのぼりは持ち込めないばかりか、ゼッケンを身に着けることさえ許されず、従わなければ退去を命じられるとは、自由な市民社会では考えられないことだ。それを、広島市が8月6日に営む平和記念式典の会場となる平和記念公園で行ったことに憤怒を禁じ得ない。

この式典の正式名称は「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」という。あの原爆で命を奪われた人々を悼むとともに、二度と戦争をしないと誓い恒久平和を願うのがその本旨であろう。整然と安全に式典が行われることにはまったく異論はないが、それを理由に、この場で核兵器廃絶や反戦平和を訴える言論や表現の自由を封殺することは決して容認できない。昨年5月のG7広島サミットでは、この公園の周囲にフェンスを張り巡らし関係者以外を閉め出すということが行われたが、またも法的根拠なく警察や行政の一存で市民の行動を縛るという暴挙がなされた。まさしく「有事」に備えた国民統制の実験が繰り返されている。「新たな戦前」どころか、もはや「戦中」に入ったと言えようか！

井上 俊逸

「わけの分からない例えで国民を騙し、本質をごまかそうとしても、わたしたちは騙されない」SEALDsの女性が安倍首相に向けた言葉です。

ほんと、その通りです。どこの誰が日本の国を襲おうとしているんでしょう。武装して平和を語らないでほしい。

川田 マリ子

「もしも、あのとき・・・していたら」

と、後悔したり、天を仰いだり?・・・私正直、これまでの日々は、そんな事の連続でした。何となく気づきながらも、そのままいいや、とその時は自分を納得させたものの・・・

といったことは、実は私だけではなく皆さんにもありませんか。

これが個人のことであれば、自業自得と自分を納得させるしかないでしょう。しかし、私たち一人ひとりの集合体である「国」の場合はそうはいきません。赤信号がちらついているのに気づかないふりをしたり、皆んなで渡れば怖くないなどと開き直ったりしては、取り返しがつかない方向へ「国」は進んでいきます。

もちろん国自体には意思がありません。とすると「国」を方向づけていくのは、私たちの選挙の結果選ばれた政府です。その政府は残念ながら安倍政権以降、今の岸田政権に至るまで平和憲法を骨抜きにし、軍備を拡大し「戦争のできる国」へ向けて、ひたひたと歩みを進めています。

そうです。私たちはいままさに「もしも、あのとき・・・」の曲がり角に直面しているのだと思います。だから、一人ひとりが、後悔しないよう、声をあげていきましょう。そしてJCJは皆さんが「わいわいがやがや」と話し合える場を共に作っていきたいと思います。

「平和」もまた抽象概念ではありません。今を生きる私たちのかけがえのない日常そのものなのですから。

古川 英一

ウクライナ、パレスチナでの戦闘は終結の兆しも見えず、核軍備核拡散が進み、戦争の火種が各地で燃えくすぶっている。長崎平和祈念式典では米欧の視点が人命、人権、平和には無いことが露呈されている。「平和国家」日本のジャーナリスト・市民はどう立ち向かう？

吉原 功

日常起こることが災害時に顕著に現れる。
戦争は国家が引き起こす究極の人災だ。

先の大戦で多くの女性が性暴力の被害者となった。
その後を生きることは「恥」と教えられ、自分を「汚れたもの」と思わされてきた。
そう思わせてきたものは何か。
そこに多くの男性たちが加担しながら蓋をしてきた歴史がある。
長い年月を経て、
自身の体験と、それを強いてきたものとの関係を考え続けた女性たちは、
自らの尊厳を守る為、次世代に同じ体験をさせない為に声をあげた。
どれだけの歳月を必要としたことか。その告発は今も続く。

翻って今日の日本社会はどうか。
多くの性暴力が日常的に起きている。
いや、やっと可視化される時代になったと言える。
蓋をしておきたい人間はいつの時代にもいるものだ。
そこにメディアは関わってはいまいか。

性による支配が
長年にわたって女性・男性の尊厳を奪うことを
学ばせねばならない。

日常起こることが災害時に顕著に現れる。
日々の暮らしの中で、自分の頭で考え、小さくても声をあげる。
軍拡に進む日本の中で、私の抗いとする。

谷岡 理香